

松浦佐用媛石魂録

後編

四

913.5

マ

後編 4

松浦佐用媛石魂録後編卷之四

東都

曲亭主人

編次

第十七回

再厄僅一釋一舊僕一遇ふ

輪粟婆々が獨兒ある。相肩棒太と呼きい。酒を食り賭變を嗜く。奸智一長たる惡棍なる
 母の輪粟も煩囂にて。竊疾さへ有ものあまば。親子折々謀合一く。よろらぬ伎倆ををる
 事多う。さるより輪粟婆々い。いぬる日一俊平が。秋布の護身囊を。庖福の柱一掛志れ
 一を。遂早く偷奪て。己が宿所へ竊遣せ一を。棒太の裏面一金もやあると。思へば糖く披死
 見る。秋布が親良人の。戒名俗名を記せ一楮牌と。秋布が生れ一時の。年月日時地名さへ具
 一記一つけさるあり。聊文字を知りされば。はくぐと之を見て。彼秋布と云女旅人い。
 儔早ある美婦人ふて。齡も廿一足らむと聞。渠を欺詐りて引出。售らば夥の金一な
 るべ一。さばれ彼俊平と云奴が。必苛く崇らんと。欲をる事のあらむや。其折ふ



大田言葉後編卷之四

東京金玉出版社

とが母ふ。箇様々々ふいひせんふ。送ふ證據のなれ事なれども。彼等の他郷の者なれば。言
勝る事あるべうらむ。斯十二分ふ謀るといふとも。灰は聞く。彼主従の。明明後日の比
西國へ。赴くとういふあるふ。遅々せば。臍を齧とあらん。先が母を呼かへて。商量せん
と。肚裏ふ。計較既し定りけまば。己が夥計の輪夫ある。三里の非三と云。惡校ふ。機密を告ぐ
使と一つ。素より妻子の無りしを。産一つと。いひあへらへく。猛ふ輪栗ふ暇を請へく。還
ると聽く。とが密謀を。云々と説きまふ。愁の爲ふ身をも忘る。貪婪無慙の惡婆ままば。頭
を傾け耳を寄く。聞く事既し半响むうり。斑ある齒を顯へく。思ひを高く打笑ふを。嗜漫
之。音高しと。棒太ふ心。つけらまき。鉗もやらぬ口ふ手を。蓋ふし押へく。四下を見りへり。近
屬夢寐のようし。も。さる財儲の商量を。聞く前表といふ。今知りぬ。とが兒を譽る。よあらね
ども。和郎が。這回の計較の。後の後まで。脱落なく。謀り得く。究て妙之。継彼俊平奴が。強情
張る。争ふとも。角口ふ假托。結果。當分影を隠さん。の。爾らば左せよ。右せんと。密談
ふ時。移し。さる。此日未の左側より。棒太の難波村ふ。赴く。竊ふ秋布主従。が形勢を張

ふふ。既ふま。晡時より。俊平の行装。し。西の船場へ。今の十三間川の。もととなるべし
赴くを。定ふ見認。さりければ。聽く宿。所ふ走り。歸る。云々と輪栗ふ報く。計策を。行
せ。俊平の船場ふ。暴し疾ひ發りぬ。と。秋布を。敗た。準備の。駕籠ふ。打乗し。棒太と
非三ふ。昇いそがし。東の船場へ。今の八軒家の。もとあるべし。將て行。い。夜舟に乗し
と。伏見の花街。京師の。妓院へ。售らんとく。秋布の。年尚若た。女流なれども。三稔。以来。逆
旅の。艱苦を。喫せしより。人情を。よく。解し。俗事。不馴。さる才。あまど。此。時既。母免。れ難。た。
禍鬼。母あ。ふ祥。ふや。ありけん。俊平が。病。病危。し。と。告。られ。さる。小。駭。速。く。輪栗。を。些。も。疑
い。む。且。瞋。昏の。事。ある。小。輪。子。ふ。ま。ら。来。せ。ら。れ。く。ゆ。く。て。の。西。を。東。の。方。に。將。て。ゆ。う。ゆ。を。
も。曉。得。ら。む。し。く。路。いと。速。し。と思。ひ。けり。有。然。程。小。俊。平。も。輪。栗。婆。々。小。謀。ら。れ。さ。る。秋。布。を。
逐。留。ん。ど。く。只。一。足。も。萬。歩。ど。し。つ。東。の。船。場。を。心。當。ふ。日。比。信。む。る。神。明。佛。陀。の。御。名。を。念
し。祈。願。を。掛。て。路。の。凸。凹。嫌。ひ。ぬ。く。接。し。接。で。急。ぎ。し。ら。ば。今。の。田。嶋。宮。崎。の。兩。町。の。あ。ま。さ。る。
田。圃。の。邊。ふ。至。る。時。折。う。ら。隈。な。た。夕。月。光。の。白。晝。の。加。く。明。う。り。ける。よ。前。面。遠。く。見。渡。せ。ば。

一挺の十字駕籠。一箇の老婆と覺てた者。附従ふく。噎道を。東へ只管走るあり。被ふる
 べし。と思ふ心の。飛立むうり。早まども。前途の。一徑路あるふ。後より通らば。追失ん。被
 より先へ邁拔く。捕留ん。と尋思を一つ。路を打た田の畔を打送り。いよく頻り。小急ぎ
 一り。思ふよまゝ。さる捷徑。渠より。いれ。一町むうり。噎の東。遠り出たり。既濁
 た息され。堪べうも。あらざり。を。嚙々。路傍。樹枝の蔭。埋伏し。近づく。未だ
 件の駕籠を。遣りも。過ぎ。跳出て。棒端。取。推戻。怒まる。聲。状。ぬ。立。汝等。いう。小膳太
 くとも。泰平の世。主の婦人。を。勾引。さんと。欲。を。首の。飛ぶ。をも。忘れ。定。鳥。漸の
 白徒。あり。并。う。へ。さ。む。や。と。敦。困。力。を。究。め。突。突。辰。せ。棒。太。と。非。三。の。些。も。駭。が。む。遣。損
 ひぬ。一。肩。休。め。と。喧。た。な。が。ら。其。儘。路。傍。打。卸。を。駕。籠。の。内。なる。秋。布。の。俊。平。が。罵。る。声
 ふ。原。来。が。身。を。輪。栗。等。ふ。謀。ら。れ。け。り。と。初。く。曉。さ。す。打。驚。た。つ。出。ん。と。ま。は。す。豫。々。准。備
 と。ま。さ。り。と。覺。く。駕。籠。は。垂。る。筈。簾。を。外。面。より。緘。され。ば。や。喃。あ。を。開。け。む。や。と。叫
 ぶ。を。笑。ふ。非。三。棒。太。の。各。々。息。杖。突。立。く。駕。籠。の。左。右。立。たり。ける。登。時。輪。栗。の。進。と。出。俊。平

は打對ひて。あや瀬川の若黨どの。世のさまじくのものぞう。今更思へむ。你的爲ふ。吾儕
 の正しく。主を。おさる。縁故も。得。あ。ら。む。して。勾引者。の。騙。兒。の。と。ふ。さ。ふ。さ。一。た。事。宣。ふ
 ち。知。ら。む。い。ふ。聞。せん。耳。の。垢。を。小。指。の。爪。で。搔。出。し。聞。ね。か。あ。の。秋。布。の。吾。儕。の。女
 兒。棒。太。が。爲。ふ。妹。之。と。む。う。り。ふ。て。何。の。故。と。も。思。ひ。と。う。で。疑。れ。ん。言。長。く。と。も。聞。給。へ。
 吾儕の良人が武藏なる。金澤に在り。此の秋布を産かど。世渡る稱が廻らねば。子共二人
 の争ひ難し。吾儕の然るべた方。はの。乳母は出んと。思ふ折。執權はの。御内人。博多彌四郎
 ぬしの内室が。石切山。ふく。女の子を産ぬ。當分。乳房。ゆるむ。と。媒。姪。を。る。人。ある。よ。より。二
 が。女。兒。を。里。親。に。委。ね。く。博。多。ぬ。へ。參。り。ふ。根。が。山。中。に。産。の。氣。は。た。く。分。曉。さ。ま。一。赤。子。な
 きむ。生。れ。く。纒。ふ。三。日。の。曉。昏。睡。死。し。息。絶。たり。當。下。ある。彌。四。郎。ぬ。一。竊。し。吾。儕。に。宣。ふ
 やう。二。が。夫。婦。此。年。来。子。の。あ。う。ま。を。う。ち。敷。た。く。神。小。祈。し。佛。小。念。じ。く。漸。く。産。せ。し。女。兒
 なる。ふ。七。夜。ふ。も。及。ば。む。去。く。か。く。も。空。しく。なり。さ。る。を。二。が。妻。に。知。せ。あ。ば。忽。地。血。暈。并。り
 ぐ。共。に。黄。泉。の。客。ふ。や。あ。り。て。ん。殤。兒。の。事。の。惜。め。ど。も。甲。斐。あ。り。此。哀。を。ふ。又。一。層。の。歎。た。を

添そる事ことあらば。不幸ふこうの上うへの不幸ふこうありむや。依よりて汝あんがと密談みつだんを。里親さとおや許違りつかへたる。汝あんがが女むすめを
且まく貸かせ今宵こよひ竊ひそふ入替いれかへて。二ふたが妻つまの云々まかまと。女むすめの死しせし事ことを去さらせむ。かく産婦さんぶの
肥立ひだては後のちの。又またせん術そとのいくらもあらん。枉まげく此議このぎを承引うけひきく。苦くるし死しを資たけよとく。泣なぬ
むりりよ憑たのませ給たまふを。否いなといんんさまがふく。良人をとこふ告つげる暇いとまなければ。其宵そのよひ竊ひそふ里親さとおやよ
り。吾わが濟あひが女むすめをとり復かへへり。入替いれかへされば。吾わが濟あひの二ふたが子この乳母めのとありく。一ひととせあ
まりを過とせども。貸かする女むすめと返かへさまねば。己事やむことを得えむ良人をとこふ告つげく。折々ありくある。彌や四郎しろうぬ
ふ。竊ひそふ催促さいそくするものうら。左ひだりの右みぎのと難澁なんじゆと。並ならべ立つ。事ことゆるむ。あまりよ精せいの彈つまきま
豫かくの密議みつぎ状じやう與あはふ。告つげんといひ。一ひとは行あり通とりくや。いゝる。趣理おもむきりぬまども。今更いまさら女むすめ
と返かへへくる。妻つまの思おもへん程ほども面おもなく。且外聞かつひきもよろしくらむ。親おやとあり子ことある事こと。おま假深かりそめ
の縁えんあらんや。過世とせより結むすびたる。宿因あやういんとあそ。覺おぼるふ。枉まげく女むすめをまれば。得えさせよ。其代そのかえふ
の少分せうぶんあがら。二百金にひやくきんを酬むくとせん。承引うけひきてよ。と拜おがまぬむりふ。うた口説くちごとま推辭いひかまよ
なく。遂つひふ其意そのいは任まかせし比ころ。金二十兩りやう贈おくりられく。おま約束やくそくの手附金てつけきんあり。この餘よは近ちかたふ調あやう

達たつせん。霎時まばし俟まちねと。さる氣けなく。吾わが濟あひを告あげ欺あざむたる。然その、ち後事ごことふ假托かこつけく。吾わが濟あひは暇いとまを取とり
けり。吾わが濟あひがをらば。件くだんの密事みつじの漏もれもやせんと思おもひまけん。初はじめ似にぬある。の殿どのの計はから
ひいいと憎にくけまども。世よ主あやう従したがひ理非共りひご。勢いきほひ異ことある者ものあれば。切せめく殘金ざんきん百八十兩りやう状じやう通わ
與た給たまへと。債はたし。今いまとく急きうふの調ていひ難がたし。手實てがたを書かく。とらせん。今茲こゝしの暮くれまで俟まちね
とく。名印あいにんを打うたる一通いつづつの。證文せうもんと遞與わたさまきま。違ちがひあら。と心こゝろ放はなす。金澤かみざわへ歸かへり
比ころ。良人をとこの其處そこに住すまひ。所縁よそえんふ就つく浪速津なにはつへ。赴おもむくと云い儀ぎ項かの起行たひだち。今霎時いままばし俟まち給たまへ。今茲こゝし
の暮くれふの博多はかた殿どのより。百八十金ひゃくはちじゆ遞與わたさんとある。證文せうもんのあるものを。此地このちを去さらば便べんあり侍
べし。枉まげく春はるまで留とま給たまへと。諫いさめても留とまらぬ。良人をとこの無む怨やいの上じやう人物にんぶつ。貸かけまども錢財ぜに
ふる。絶きれえかれよ死性しがなまき。縦たて手實てがたを握にぎるとも。遞與わたせし殿どのふ實まことなく。暮くれまで俟まちと
も其詮そのせんなりらん。倘もし又實まことある人ひとあらば。浪速なにはへ移うつり住すまるとも。件くだんの金かねを贈おくり給たまへん。思おもひ
立たつて吉日きちにちあれ。まきの浪速なにはへゆくべしとく。幼稚をさか丸まる杖づたを携たづせ。舟行ふねより此攝津國このつづのくにへ。赴おもむ
く良人をとこと引ひきま。留とま給たまへくも非あらざれむ。吾わが濟あひも俱ともに浪枕なみまくら。海上うみ無な更さらふえる。と。此地このちの

人とあり一より博多殿の件の金を春ふありても給ひらむ腹さしさを八入ふまゝ催
促せんふも山河千里と隔てぬ。そも心ふ任せむ。どらくまる程ふが良人の五十の秋を
一期ふまゝ返らぬ旅ふ趣たしより。年尚若た獨兒の棒太ふの十字駕籠昇り。細た烟と
立るふも。忘れ難たの件の金。いうで棒太を鎌倉へ遣して物ふせんと。思ひざる日のあ
けきども。そが盤纏をら整ねば。思ひながらは黙止せし。博多殿の昨歳の春ふやあら
ん世を去り給ひぬ。又とが女兒秋布の。瀬川采女吉次とう云御内人の。奥さほふのなりされ
ども。瀬川も早く身まがり。蟠婦ぐら一の程もなく。若黨某甲と云者と。情由あり。透電ま
さり。と風の便りふ聞かど。おらふ隠れをらんと。神ならぬ身のまらむ。去歳の
冬より備ま。看病せしも親子の奇遇。然れども日比名を呼んで。後室との唱う。お
ほ知るよ一のあう。一。昨夕まで三夜さの夢ふ。とが亡夫の枕ふ立ち。汝が日比備ま。
給事する旅宿の蟠婦の。則女兒の秋布。むら博多彌四郎ぬ一の心ざは汚穢くて。取ら
せし手實を反故ふ。一。彼百八十金を贈らまむ。この故ふとが兒の棒太の。發迹るよまがも

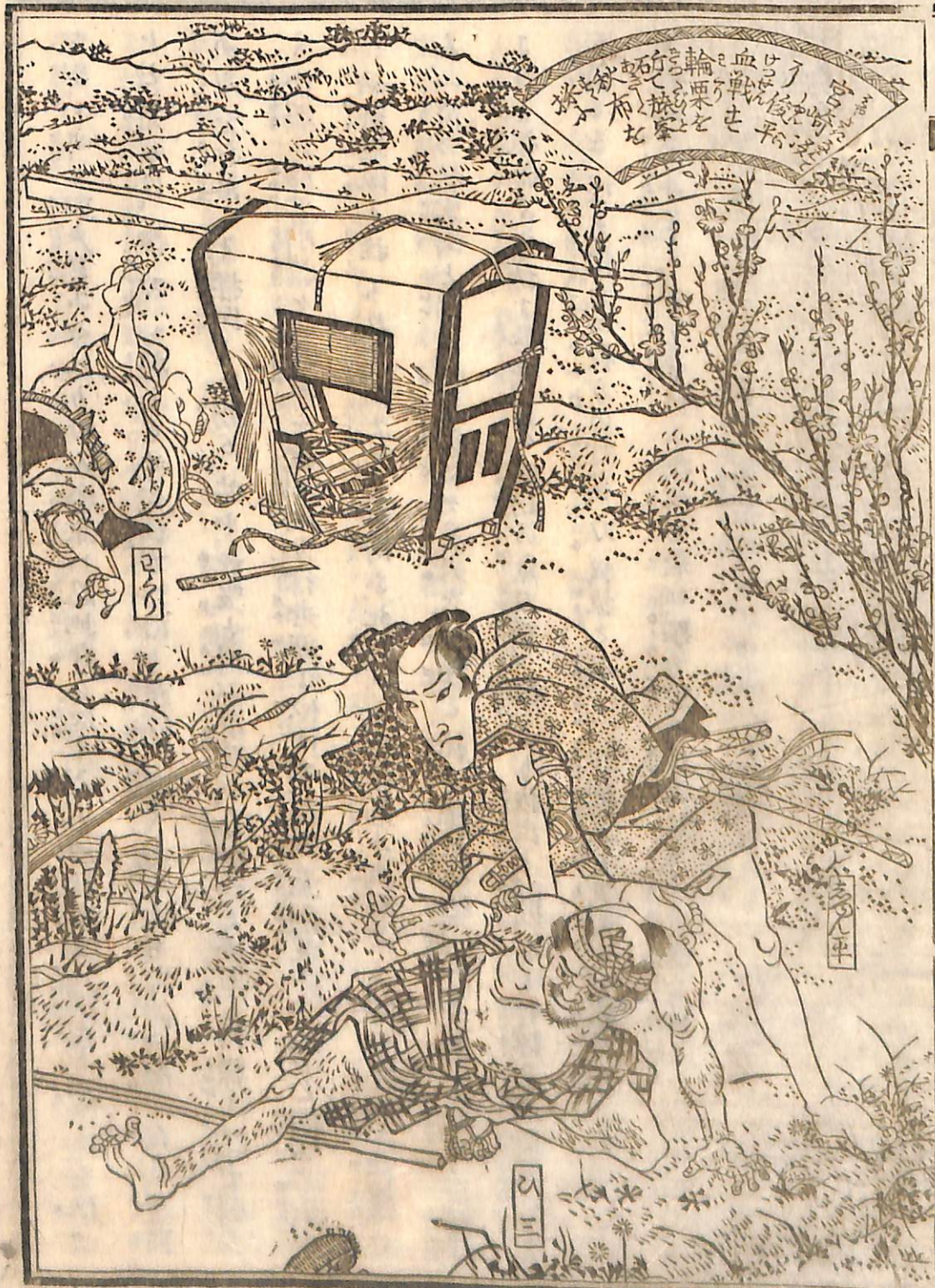
なく。身を牛馬ふ等しくま。世を渡る事不便。とく秋布をとり復し。今より後の資よせ
よと。告られしより胸潰れ。心を泣け。熱視ま。現後室の面影れ。女兒ふてあり
けりと。思ふ證の胸前の黒子も覺あり。年長くいと。面がわりせしやうあれども。
人胤の竊まむと云。世の鄙語の空しう。で。爹々親よく似たりけり。緋云々と打明。名告
とせむやと。思ひしうども。子で子あらぬ杜鵑。實の親を。鬱悒く思ふ。今の夫と逃走
らば。黄金の夏を断らま。宿所へ早く退た。棒太と商量せむやと思ふ折う。人の来
ければ。おほ然氣なた面色して。身の暇を乞ふ。宿所は歸し。兒よ由を告う。誰が
了簡も異あらむ。所詮欺詐く誘引出し。詳は因果を説合め。今より親子一所は居らん。よ
く孝行を盡さんと。素直といひ。扱あるべし。おほ密夫ふ添んと。親を親ともせぬものな
らば。宿遊女ふも沽却し。博多殿は謀られ。八十兩の損をまるとも。百金を身價で。取
るよ。あらんと。尋思をま。今中宿へ將くゆく因縁。其来歴の件の如し。かくても禁る
敷。争ふ敷と。深た伎倆の長物語。唇薄た紅刷毛の舌も廻り。細竹色。緋を奪ひ。惡

婆の達辯駕籠の。裡面ふく聞く秋布の。虚言おらんと思へども。言の巧は迷ひさまく。虚實
を決うねりけん。よ、と泣く音ぞ洩さふける。俊平これを打聞て。小膝を拍く啊々と
打笑ふの。些も騒がむ。叔巧どりおいらへとり。され西國はありし比。総角よりして瀬川
殿。二代の主は仕へは、博多の家事ふい與らむ。後室の誕生を。定う小見さるも此取らね
ども。石切山ふく生れはほひ。其絳の趣い。人傳ふよく知ま。思ふ小汝悪婆の徒。俺們
男女の主従が。久く此地は僑居を志さるより。淫奔の日蔭人とや思ひけん。あ、を
もくさほくある。惡心を起す折いぬる。比日が謬く。危福の柱は掛志れさる。後室さほの
護身囊をいち早く竊取。囊の裡面ある戒名實名。且誕辰の歳月をたうらむ。知るる邪
智奸計を。遅くせし虚妄の長談。人の耳目を欺くとも。され決り實言とせむ博多殿
より賜。手實あらば出く見せよ。手迹と名印は相違なく。二百金ふい足らむとも。盤
纏を取らむ。素よりさは證文の。あるべうも何らさむ。ありと云とも胡論之
日。主従を他郷の者と。思ひ蔑る光棍共。刑の守の廳へ牽らば。彼も此も推並べ。刃の

縮とちを奴おまじども。身は失望を抱る主従。かゝる細事は拘づらひ。時日を費す事を好
まむ。とく後室はこれと透與し。空輪むとく退け。命の助け得させんむ。といひせも
果を輪栗婆々の。身を突著く。声いうめく。是在若黨の落著貌なる。博多殿の女兒の生さ
状。眼前に見る和主でも。入替子の絆の秘密を。和主が知ふ談い。人知さぬ秘事を。
論。主とをゆならば。得知ぬ事の皆虚詐欺。論より證據證文と。何處までも。出て出。日が子
を日が子にせざらんや。刃の縮せらゆべた。身の科犯せし覺い。おたよ。和主は命と助
らる。施しおあふ好も。戯言吐ふと罵さども。俊平些も騒がむ。嚮ふも屢々
云事おがら。證文手形のあるおらば。どくくお、へ出して見せよ。といへば輪栗の目を刺
く。あべう。こうべう。其術に喰ぬ。引は破る。紙一枚。虚々と和主に見せ。引裂れ。を懐ん
でかへらむ。手實の表は百八十兩。十八九年の利足を如え。四五百兩もあるべたを。二
百兩おらば負もせん。捻服紗をむつまると。腰着る盤纏をそが儘。透與し。女を受取
るとも。女を透與して盤纏をそが儘。持くいぬとも。二つ一つ。とくく。時を明や。と日め

けバ棒太も進み出く。おや生白け一若黨どの。昔の昔今を今。あの秋布の己が妹推黙て
 聴聞されば。敵手と老女と侮く。どうらぬ事とどうり貌。むづうーくいゐるまじど。そと聞
 てゐる暇いふ。いひぶんあらば何處へでも。持出しものといへ。棒組違ふ。と息杖を突
 鳴らしつゝ、先棒へ。立を見うへは三里の非三。扱ががい事。今宵夜一夜うけあふても蛙
 の面へ水かけ論。蛇蛇よりも長くなり。短くありま候草臥。晴氣馮一が尚甲夜敷。誇いとが
 ん。と後棒へ。肩推入れ共侶。撞出をを違らとと。駐る俊平柱る輪乘。携るを丁と
 突返を。御利を歐せ。利手の秘術。舟。粟輪を叫苦と仰反て。葦蔭舟付きけり。素破狼藉者
 親の仇。逃しをせ。と駕籠打印を。棒太の息杖打振く。撃んと進めば俊平も。刀を抜く受流
 一。受流したる再度の厄難。透を窺ふ三里の非三。俊平が背後より。頭を臨て撃つ息杖の
 閃く程。身を沈ま。左へ避けば勢ひ餘り。棒太が肩と暇と打つ。同士撃を。と罵
 る。前後隙を奮撃突戦。駕籠の裡面ある秋布も。絆急なまば氣と悶て。懐よまざりける。短
 刀晃りと引抜く。堅く織る楚戸。斫斫斫。出ると見うへは相肩棒太。やよ好貨を走ら

まか。と叫ぶ。胴声耳ふや入りけん。輪乘の忽地身を起。そや秋布を捕んと。寄るを依せ
 いと。晃ら。懐刀と物ともせむ。彼方へ潜り是方へ避く。あちこち霎時疲勞したる。透聞
 小刃と打落。揉倒。動くせむ。吐嗟と叫ぶ唇吻へ。手拭銜を布囊。襟上抓で引立
 小脇小締著引摺々々。東を投く走り行老婆。似げな。力量剽技。違らと思へ。俊平
 の。兩箇の敵。柱られ。いと。せん術を折う。稲葉蔭。立躲き。絆の邪正を。閑窺け
 ん。一箇の行客。衝と出く。輪乘。肩尖を。無手と抓で推戻せむ。妨を。と秋布を地上
 一控と振捨。手拭。巻巻る。鱗切の魚刀を。懐より拔出。閃う。打揮。胸前臨て
 突懸るを。些も怯まぬ。彼方の行客。刀拔。三合。撃よと見え。輪乘。身を天
 さほ。筋斗。首を背後。撲地と飛び。軀を前。付きけり。此光景。非三。棒太。かち
 いと。思ひけん。逃んと。走るを。俊平が。あびせ掛。手煉の。大刀風。背肩尖。燦ひ。深く。深手
 小弱る。兩箇の。光棍。息杖。摺。登。懸。十々。滅の。刀尖。刺。留。霎時。も。息を
 吻あへむ。血刀。軽。拭。納。彼行客。打對。何處の。人。知。ね。ども。大厄難。を。救。



是主従が大幸あり。貴名を聞まねけき。といひつ、歩まよほ程。秋布も素まよほ。鬚の
後毛搔揚く。あの惡棍等謀らまき。危窮も通り主従を。拯せ給ふも再生の。高思ふも
侍るふれ。名告らせ給へと共侶。左右ふつゝいて。請問ふを。と見かう見たる件の行客。初
笠を脱捨く。南後室さほ俊平どの。いうふ養七を認忘れ給ひ。といひまき驚く。是方の
主従。この什麼。とばうりに。且歡び且訝。お月光ふつろく見れば。四とせ以前
世を去ふた。と思ひ。若黨関養七。紛ふべうも非まきむ。秋布の感涙の。えふり落るを袖
禁めく。南養七。和殿のこらにが使ふ立く。西國へ趣たさる。其冬も次の春も。俟ふ甲斐なく
日比屋。七里の濱。流まよりい。こらにが和殿齋して。こが所天へと贈らる。彼一
裏ありけるを。不測守の(時宗をいふ)齋して。こが所天を召うへせと。此比博多倍太
ぬいを。西國の陣中へ。遣まき。と然後。灰傳へ承りた。か、まば和殿の道中。仇
おを人ふ撃れまけん。と思へ。いと痛く。夜毎々々の看經ふも。和殿の俗名戒名を。念
く菩提と吊ひるる。恙もなく。今宵今。環會しを死する人の。甦生する心地。ぞを御歡

いさと察し給へ。といへば又俊平も。絶々久し。養七ぬい。鎌倉ある主家の難を。詳し傳
へ聞給ひ。敷博多殿さへ。主人さへ。非命に終らせ給ひ。この故。某が。百折千磨
の難難劬勞の。既ふ三稔。及べども。未だ仇人。環りもあなむ。心の憂苦と。猜くよ。と云
養七目をまばた。たぐ。死よりけんと思ひまき。某が事のうへを。物の屑もあらざめ
ど。申まべた事居多あり。仇人の所在。伏せ得た。御物語もせまき。敬せど。惡棍もせよ三
人まで。切害一つ。虚々と。此地方を立去らむ。莊客們も抑留せまき。輝の難義もある事
あらん。か、まば今更おのまき。閑談の室。非む。誘給へ他所。避く。送し意中を。盡まべ
いと。云ふ秋布も。俊平も。まうはべ。と應へ。主従三人。天満の方。趣く事既ふ。十
町あまり。及べる時。尚甲夜ふ。河原。添ふた。一軒の酒樓ありけり。主従あ。ま休
んと。齊一矮樓。うち登りて。酒を篩せ飯と出させ。心静ら。飲食一つ。過去うさを
相譚ふ。養七声。潜く。某御使を。承りり。西國なる。陣中へ。趣く道中。掃磨の
室まで。到る。日。西國へ。渡海の船。此曉方。出るあり。登時。某思ふやう。陸地の風難な

と雖も其速死事弓と強之。風ごよよく舟行あそ。只是千里一時之便船せん。と尋思を
つ、其瞋昏より船に乗るは同船の旅人。水主稱採等の陸に登り一人もをらむ。よりて
某只一人。管を被ぎく甲夜より寐し。船底小痺者あり。熟睡せし比潜びよりく。氷なき
白刃をもて。某が呪のあざりを。刀尖深く刺留り。某是に驚死覺く。竊ふ手をもて刃
を探る。幸よ一々氣管を外き。刃のうさを外に向ひり。よりく自うら反切て。身を起し
つ、彼痺者を海へ水と所落せしが。某も亦深痰なき。そが儘船に付し。同船の人々
水主稱採等。漸々小歸り来り。某を見く驚死駭ぎ。片息ありしを室津なる船長許資容
つ、醫師を招けり。金瘡を縫せ。湯藥を與へく。勸たり。かくて船も其曉方。纜を解され
ども。某の長が宿所。病臥を事日比を歴り。件の長の性とし。情ある者ありけれ
ば。いと懇切に勸るものうら。圖らざりける厄難ふ。火急の御使を果を事得らむ。且大
切なる行囊を。船中ふく失ひりと。船長の知む。主も亦死行囊と。某が物あらんと
思ひつ、預り措ぬ。かくく某が金瘡の。聊づ、瘡る比。長船の彼行囊を。某に返せ

うども。そを某が物あらねば。云々と斷りし。かの折船此畏の。外ふの物のあら
し。と云よよく疑ひ惑ひく。件の裏を披死見む。裡面ふの雨衣やうの物と。一通の手
實あり。その文言。此度於道中。博多彌四郎が若黨。関義七を斬害し。秋布が。其良人瀬川
采女に贈遣。一を奪取。證據とし。携歸らば。賞錢の乞ふに依るべたもの也。歳
月日。勘八殿へ。鼠川加二郎と書し。あ、小初。仇を知しぬ。勘八が船中ふく。某を撃
んとせし時。先行囊を竊略。背負ひあどとらん。そが儘海へ破沈め。うら。行囊さへ
失ひぬらん。と思へば。遺恨やるうさもなく。大切なる御贈物さへ。失れしに。越度を。ま
う。とくよ。ねしと雖も。此一通を。徹として。守へ。祈奉らば。彼鼠川等が。奸惡の。願
ん事疑ひあり。と思ふ。むらりを。心やりし。痰養生を。志する程。其年の。果敢なく。盡て。旅宿
は春を迎へ。愈んとし。又破る。舊瘡は。苦められ。心むら。焦燥ども。病疴小勝
んよ。の。おけ。ま。お。室。在。る。程。肆。月の。比。鎌倉。有。る。主。家の。災。害。灰。に。聞。え。く。且。驚。死
且。歎。く。憂。苦。腸。を。斷。可。あ。れ。ば。瘡。を。全。く。瘡。ら。ね。ど。も。船。に。乗。つ。伍。月。の。比。稍。鎌。倉。に。歸。り

て聞けば。御身の仇討の御願ひ叶はせ給ひ。村澤俊平一人を將。何處となく起行給ひ
た。今の三十餘日ふありぬ。と告ぐれ。よりい。うて。され。迹を慕ひ追著まゐらせ。旅路の供
立んむ。と心。ばうりの早きども。舊藩頻り。不再發。一歩も。運。動。事。得。あ。ら。む。是。よ。り
博多倍太郎ぬ。の。御宿所。に。逗留。して。を。さ。く。療治。を。加。え。う。べ。大。約。十。月。あ。ま。り。よ
り。終。つ。ひ。瘥。快。ま。さ。り。な。り。有。程。ふ。御。身。の。迹。を。慕。ひ。ま。ゐ。ら。せ。既。に。鎌。倉。を。立。ん。と。せ。し。時。倍
太郎ぬ。の。情。深。く。て。盤。纏。二。十。金。を。賜。う。け。れ。ば。首。途。の。前。の。日。に。賣。卜。の。翁。に。就。く。御。身。の
往。方。を。占。せ。し。に。陸。奥。の。方。を。索。よ。と。い。は。れ。し。を。實。と。し。去。歲。の。春。よ。り。陸。奥。か。る。五。十
餘。郡。を。經。歴。し。て。徒。ら。に。盤。纏。を。費。し。今。茲。に。春。よ。り。京。師。に。上。り。て。お。ほ。御。往。方。を。索。る。程。に。
某。が。宿。と。し。つ。る。に。諸。國。か。る。商。旅。等。の。定。宿。と。せ。し。客。店。お。ま。じ。ば。合。宿。の。行。客。入。代。立。謝。し。
膝。突。合。を。る。可。お。ほ。し。宵。に。徒。然。小。堪。ぬ。も。あ。り。て。雜。談。怪。譚。思。ひ。く。く。し。人。を。慰。め。自。ら。慰。め。
興。む。る。者。の。多。う。ゆ。中。に。い。ぬ。る。夜。或。人。の。い。へ。り。ける。に。肥。前。國。彼。杵。郡。か。る。伊。万。里。の。莊。に。鼠
川。加。二。郎。と。云。武。士。の。浪。人。あ。り。一。眼。に。瞥。て。一。足。も。少。許。瘳。り。さ。ば。れ。武。藝。の。達人。と。ぞ。云。お

る。甚。麼。か。る。故。ふ。や。世。を。厭。ふ。く。里。人。よ。ご。も。交。ら。む。然。る。武。藝。に。捷。き。一。人。を。埋。木。ふ。ま。つ。る
事。いと。惜。む。べ。し。と。ぞ。語。り。ぬ。某。是。を。側。聞。し。て。心。を。盡。立。む。う。を。あ。り。し。を。お。ほ。然。ら。ぬ。面
色。一。く。其。鼠。川。が。人。と。あ。り。を。具。に。諮。問。け。れ。ば。其。人。答。て。否。僕。も。件。の。人。と。相。識。で。い。お
け。ま。じ。ども。舊。に。鎌。倉。武。士。ふ。一。く。今。に。妻。子。も。あ。り。と。い。へ。り。か。ま。ば。伊。萬。里。の。浮。浪。人。の。仇。敵
加。二。郎。に。疑。ひ。か。し。縦。今。に。が。身。一。つ。で。あ。あ。る。と。も。索。行。く。討。捕。む。や。と。思。ひ。さ。る。よ。あ。ら
ね。ども。三。年。以。來。旅。宿。し。て。仇。人。を。索。給。ふ。と。聞。え。し。御。身。主。從。に。告。む。し。て。ま。れ。の。と。一。人。い
う。ふ。ま。べ。た。只。速。に。御。往。方。を。知。せ。給。へ。と。旦。暮。に。あ。ら。ふ。る。神。佛。に。祈。奉。り。し。ふ。昨。夕。又
あ。る。人。の。い。へ。り。ける。も。今。浪。速。か。る。難。波。村。に。僑。居。ま。る。男。女。の。主。從。二。人。あ。り。女。を。主。と
覺。た。が。儂。稀。か。る。美。人。ふ。く。年。に。廿。に。足。ら。ざ。め。れ。ど。早。く。頭。髻。を。剪。た。れ。ば。寡。婦。に。こ。そ。あ
る。か。ら。め。長。た。病。著。し。療。養。盡。し。を。世。に。名。醫。も。あ。る。もの。ふ。く。い。う。か。る。妙。藥。を。用。ひ。さ。り
けん。七。日。む。う。り。は。瘳。り。ぬ。と。人。傳。し。聞。つ。と。い。へ。り。輝。の。趣。を。熱。思。ふ。よ。そ。に。御。身。主。從
よ。お。そ。を。い。ま。る。か。ら。め。と。推。量。し。つ。る。歎。し。さ。に。云。べ。う。も。候。い。む。因。り。旅。店。を。立。去。り。て。

今朝の伏見の晝船ふ乗つ、此黄昏よ。東の船場は著うら。難波村をよろぎう。只管
 急ぐ暖道。圖らむも厄難中。行合いつく悪棍等を漏さむう。撃留う。せめくもの本意
 は辨へり。これ見給へ。と咽喉ある。金瘡の迹を見せ。又加二郎が島へ取らせう。手實を懐よ
 り。取出う見せければ。秋布も俊平も。膝の進むを覺ぬまで。感嘆う。声をたぐむ。そが
 中。秋布の塵浄手う。身を清め。四方は迎ひ。此年来。信むる神佛を拜さる。歡び氣色
 は顯きく。又叢七は打對ひ。生死存亡定う。あらで。三稔を歴る。再會の引出物。せられ
 る。仇人の在家。一言千金。和殿の功。三稔以来。艱苦の中。隸隨ひ。俊平と異ならむか
 う。まば今を一日もえや。肥前の伊万里へ赴くべ。まらにが上の箇様々々。旅中の艱苦
 を初と。偏捨庵ある。賊僧師弟。邊岫岩幕等。謀られ。既。必死。及び。無名氏。ふ
 救さる。絆の趣。を物語れば。俊平も亦秋布が。長。病著。良醫の奇方を得。事。且輪
 乘婆々。秋布が。護身業を。偷れ。其事の初より。彼等親子が。惡計の。趣。を告るの。と。
 有繋。恥。いぬる夜の。夢物語の。説も。出さむ。且。叢七が。命。めで。た。十死。一生。を得。る。再

會を壽た。今告られ。仇人の所在。末の龍華と相距ると。群を異。せ。の。ま。から。ん
 古主の舎弟浦二郎ぬ。舎兄の仇人を撃んと。欲せ。して。知。見。う。給。ふ。心。
 得難。た。事。ふ。こと。と。云。叢七。眼。を。睜。す。否。浦。二。殿。の。頼。む。足。ら。む。某。去。々。歳。の。夏。より。次
 の。年。の。春。の。比。まで。鑓。倉。ふ。在。り。し。か。ど。彼。人。の。舎。兄。の。喪。ふ。一。と。び。も。信。せ。ざ。り。た。こ。を。も
 て。彼。を。思。ふ。復。讐。の。事。あ。ど。い。思。ひ。も。う。け。ぬ。人。あ。る。べ。有。右。者。肥。前。は。趣。く。と。も。浦。二。殿。を
 訪。ん。の。要。あ。り。直。鼠。川。が。宿。所。へ。踏。入。討。果。さん。事。勿。論。之。さ。も。思。い。を。や。と。敦。固。く。相。譚
 ふ。程。は。鯨。音。聞。え。く。尤。也。亥。時。は。あ。り。う。ら。今。より。西。の。船。場。は。到。る。出。船。は。乘。ら。ん。と。酒。食
 の。價。を。酒。店。の。小。厮。は。取。ら。し。て。主。從。齊。一。矮。樓。を。下。立。外。面。へ。出。る。折。秋。布。忽。地。打。驚。た。く。
 こ。を。い。う。は。勢。ん。大。切。あ。る。御。教。書。を。失。ひ。ぬ。と。云。を。訝。る。俊。平。叢。七。ま。づ。其。故。と。語。ま。ば。秋
 布。答。え。さ。ま。ま。と。よ。仇。討。免。許。の。御。教。書。と。這。回。の。ま。ら。い。が。項。は。掛。を。懸。ふ。輪。乘。と。挑。ま。し
 時。綱。の。さ。ま。ま。を。覺。む。う。振。落。せ。敷。ま。う。ら。む。駕。籠。の。裡。面。ふ。遺。り。けん。か。の。折。は。命
 婦。丸。の。短。刀。を。と。り。揚。ぐ。鞋。は。納。め。身。小。著。あ。が。ら。御。教。書。の。事。も。今。ま。で。も。心。つ。う。ざ。り

心の轉轉せし故に。鈍まゝといふせん。と聲戦して悔歎くを。俊平に聞あへむ。然らば某走り行く。索取く追著まつらん。まづそや船場へ赴た給へ。といひつゝ走り去らんとほるを。養七急は掖留めく。今いそや時移りしを。虚々と彼處に至らば。莊客們は怪しめられく。還り來る事難うゆべし。村澤氏の三稔以来。仇討の供は立ながら。末一段ふく後室さほの。助大刀をせむもあらば。定ふ本意おた事あるべし。某聊思ふよあり。獨彼處へ立ちへりく。御教書を索ぬべし。まうらば早くて一句あほり。遅くとも三十四日。此身の安危定りあん。離解尸人は召るゝとも。御教書の恙なく。とり復へてまゐらせん。とくく船場へ赴た給へ。と云を俊平聴をま。言葉べうも非ざまば。秋布漸く推鎮めく。らにが遣せし物あれば。まらにこそ行べたれども。大望あれば思ふは任せむ。譬は行も留るも。忠義は異なる事いふけれど。養七の俊平より。齡も倍々五十に近うり。俗にいふ處分盛なれば。ともかくもいひ諱く。命は及ぶ事いあらう。と思ふにまらにが僻事ふや。と云は養七歎びく。後室さほの仰こそ。愚案は稱ひ候なれ。まうらば別き奉らん。と行まくる

と俊平の。今霎時と掖留て。理り逼ていゝるゝを。今更推辭べくもあらねど。願ふに命恙なく。速かろむして追著給へ。旗津の港口で俟んむ。と云を養七聞捨く。悍く勇めど主從が。生死不定の辭列了得ふ心よ。この月。おほ再會をまつ浦ある。鏡の宮殿影曇る。空と恨ま目送りけり

第十八回

假を認め真と假も必因あり

却説秋布の。俊平は扶掖ま。其夜更關る比。西の船場は赴た。其曉は西國船の旗津へ歸ゆ。便船く。早く浪速と離れつ。朝あ夕あふ浪は揺られ。風は撫きて行程は折ら順帆稀かりければ。是首の港口彼首の入江は。五六日づ、船歌りく。思ふふも假を日を彌る。主從徒然は堪ざれば。只養七が事をの。いうよくと潜びやり。いひ出ぬ日とてもなく。仇人はあいに歡びと。此夜はふ春の日も。遠山の蒼々ると。波の花の。眺めくらしつ。舟行あがら夏に來て。拜月も中辭かりける比。一日又風まろくと。長門州大津郡。阿川の港口は歌りぬ。三四日を過ぎむ。此風の吹うらう。と篙師等の罵る。同船の



子碓の向
秋布
七情
心

行客の倦勞きさる者れ。多くの皆港に至りて。道遠せざるも稀ありければ。俊平は秋布が徒然を慰めかねて。薦めく陸は登一つ、先は立導充く。近江津を徘徊を折らる人形出崎の方より走り行あり。俊平是と訝して。其一人を掖留め。縁由を諮るふ。其人答く。さきばとよ。お、より遙は海邊ある。向と云出崎の端。いとをういげある乞食あり。其全身の蒼ざめく。且大く腫張さるが。福来病と云もれはも勝たり。渠ものいねば。豎うと思ふ。生れながらの豎子ふていふたふや。旦ても暮ても只口は。タフシツタ。オンキヨヒタタ。キヨラタタ。キヨカタタ。ラキヨタタ。ラキヨタタソハカ。と唱るのミ。此餘の一言も。のいふを聞る者あり。渠が出崎へ流き寓りい。去々歳の春ふやありけん。人食死せりと思ひい。三とびまで衝流せし。三とびながらおふく處へ。流き著ぬる不測さ。引揚てよくく。捨る。身體は痠さへあれども。胸前には温。原來いまだ死ざりけり。試は薬を與ん。粥をもや食せん歟とく。隣む者も多うりければ。左や右や。甦生る。今での向の乞者といへば。お、らで人の知ぬいあり。然るを近江里人の女の子共が。けふも見

んとて行ふ。と云は俊平領くのミ。秋布これとうち聞て。俊平和殿は何とう思へる。今の物語をよくく思ふ。向とやらんをる病者の。去々歳の春流寓し。其身は瘡さへありといへば。倘が夫は非ざる歟。和殿も豫く知る如く。夫が夫の動の演ふて。長城野兵太と相撃一つ。波は引きく亡散の。往方のえれむ。と其折は。脱来つる奴隷が報ふた。まうらんふのミが夫の海上遙は潮は引れく。お、らへ流著たはひい歟。是も亦測難し。誇疾行く見むと云。理りなきは俊平も。然るべいと應は。主従路をいそがく。いと長やある出崎は到るふ。龍神の洞のこさふ。件の乞者のあたりけり。現傳聞は遠ふ事なく。全身蒼く腫張さる。肩毛は脱。頭髮も落盡して。癩とくいふ病者に似たり。身は海松の如く搔垂さる。袴の單衣。只一箇被く。斷離さる海人の袴繩を。圓生ふ一つ。海師の貝の木魚はさると。打鳴らう。タフシツタ。云々。と真言を唱るのミ。觀る人笑へども敢く怒らむ。隣めども敢く媚む。只折々口を開た。指をもてきし示せる。餓く物欲といふ事ふや。人よくこれを曉る者あり。登時秋布主従の。乞者の邊は立並びて。つくく。と是を見れど

も。鬼畜きちくは等ひとしれた面影おもかげの。其人そのひとは似にたる所ところの。兔うの毛けむりもある事ことれく。渠かれの亦またそれを見
るよ。心こころを認まる氣色けしきおたの。素もとより認みらぬ故ゆゑあるべし。と思おもひつ、退はりぞく時ときふも。おほ思おもひ捨
かねたる。秋布あきしの沈吟うちあんして。俊平とんぺい和殿わだのの何なにとと思おもふ。彼乞者あのかたみの最大いそいたう。面影おもかげの變果かわりはてけん。病病
の所ところ爲なされば。形貌かたちをもく。日ひが夫つまあらむとを定さだめ難がたし。まかにあれども日ひが夫つまあらば。い
でうとらに主従まじらうを。認遣まわれ給たまふ事ことあらんや。見みつ、知しらぬを日ひが夫つまあらぬ。正ましれた證あかしで侍
れども。口くちを開ひらけ指さを。物欲ものほしといふ事ことはこそあらめ。今いま来きたる路みちは師しやもありしを。
立辰たちちを買取かひり。彼乞者あのかたみは施ほしてん。誘給いざたまへとして先まに立たて。俊平とんぺいもあらはべしとして。主従まじらう
齊ひとしくの路みちへ。六七町ひたちち、まちうへる程ほどは。乞者かたみは觀みんとく。聚合つぎひし女めの子こも。各々おの／＼家路いえぢは還かへりけり。
浩處かゝるは澳おきの方かたより。快船はやぶね一艘いっそう漕こ著つく。いとどろ／＼した大漢おほをせ海賊かいざいふやあらんむらん。
身みの袖口そでぐち廣ひろた拷あの。夾衣あひぎの。涅色くろいふ漆成しやたるを。一様いちやうは衣ぎ。頭かぶの麻織あさの強倫がんだう頭巾づきんを戴いた
た。腰こしの胸金入むねがねいたる。長ながた刀かたなを横跨よこた。足あしの紺漆こんせきの野菟のかけ股引ひきと云いふものを跨つく。同色おなじいろお侍
踏皮たひふ。武者草鞋むしやわらじを穿はたり。有あ如く之て而たの件あひをせの暴雄あいら等らの。龍神りゆうじんの洞ほらのほとりより。二人ふたりむりり磯いそふ

登のぼり来き。彼乞者あのかたみを左見右見ひみかみつ。這奴こやつが太いたく腫張かくだみは。試たまし東西しやうの究竟くつせうあらん。とくく
来こよと。いひうけ。項骨えりほね無手むてと推抓おしつかんで。引立ひきたんとする程ほどは。乞者かたみの太いたく驚おどろた怕おそま。舌したを吐は
た。掌てを合あひ。邊巡あそし阿々あ、とむりり。忙あわた。騒さわぐ事こと大おほうとあらむ。煙脂えんじを舐かまる。癩蟻らみ蝦えの水みづ
欲ほし氣けある形勢かたちなほも。情なさけをあらぬ暴雄あいら等らの。いうでうるを放はなすべた。又搔抓またかいつかを引立ひきた。雷かみなり
吊つるして舟底ふねぞこへ。投なるが如ごとく推輾おしこし。えや。繩なわを解とけ。櫃びを推切おしきく。何處いづこともなく失うせ。姑なほく
ま。秋布あきしの。一袋ひとふくろの燒餅やきもちを。俊平とんぺいは齋さいし。再び出崎でに來きて見みれば。彼乞者あのかたみのいざりけ
り。おほいうふ。と訝いがむ。彼此あちこちと索たづぬ。絶たく影かげども見みる事ことおければ。いよ／＼望のぞみ失うせ
く。惘然わうぜんとく立在たむ折をりう。一箇ひとびとの浦人うらびと來きければ。秋布あきし是これを呼留よびとどめ。あ、侍はりし腫張かくだみ
の。乞者かたみの起卧おきふしする張屋ちやさどの。外よそもや侍はると問とふ。其人そのひと頭かぶを打うち掉おす。いうでうるを然さる
事ことあらん。彼乞者あのかたみの足あし薄あしたま。自みづから十歩じゅうほも運はこぶ事こと得えたらむ。去々おと／＼歳としの春はるの比ひより。あ、を離はな
る、事こと取とりし。目今いまをらぬを不審ふせんあり。といひ捨すて。えや。走去はせけり。秋布あきし傍かたを見みうへり
く。俊平とんぺい彼あを聞きた。常つねに十歩じゅうほもある。能よ得えざし。行步やちうがふ不便ふべんの身みを以もつて。他われ們らが五六町いつまたち

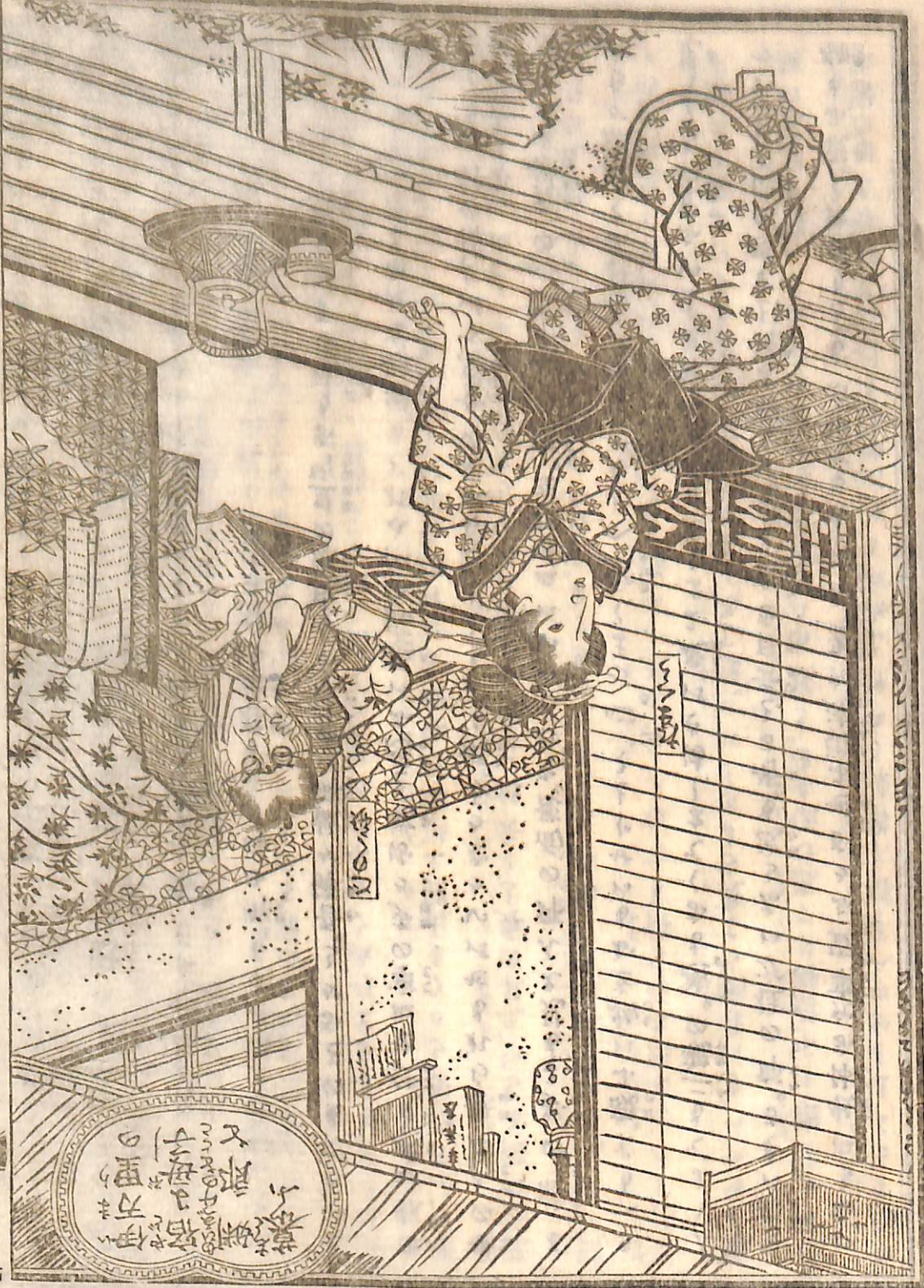
行く再び来つる間。忽然と一々失はゆ。三稔姿をあらわし。俺們を俟よりありけん。
 冤鬼など云者ふるあらぬ敷。倘果一々去らんぬ。さか夫の亡魂の。あゝふららぬ見ら
 まんとく。久しく願き給ひ一敷。見まども知らぬ面色あり。陰鬼陽人方異なれば。辭を
 かひ給ひぬふや。それ敷あらぬ敷。思へども思ひ難つ。名残惜し。喃今一とび幻ふ姿
 を願し給ひぬふや。と空に圓坐を拵拵て。鳴音を向の浦衝。翅り袖の潮垂く。磯にいるの
 こ。立ち給ひ状。俊平の理り。と思ふ心を鬼より。こも慢之今更。正し給ひ證もな死者
 を慕ひ給ふに迷ひ。仇人の所在も近づたぬる。よゝおた難たを諱忌。とくく船へ
 還らせ給へ。と言語尖く獎し。海師の貝を引起し。もて来し餅を遣し置。港口の方へ
 伴ふ折うら。船より人の走り来。只今風の直りたり。えや帆を揚る。乗給ひぬ。後ま
 後悔を給ふふ。といそがし立る。驚りさきて。主従齊一猛然と。走らぬ船に乗移さ。え
 や順風は真帆揚。其通宵走らしけま。次の日の晡時。旗津の湊。著しけり。此處よ
 り伊万里へ。程遠うらむと聞えし。黄昏比。推蒐んとく。寝刃磨る。主従が。身装

さへ精悍々々。勇進で陶焼く。伊万里の莊へ。急ぎける。不題。肥前國彼杵郡。伊萬里
 の莊。下郷士あり。隱居し。雅號を。語黙齋とぞ唱へける。陶朱が富。たらの糸ども。所得の田
 圃百貫あり。咄し食ひ。織く衣る。家は奴婢なく。妻子あり。淳世。疎く俗。不樂くも。寒
 けくも。非む。飢もせぬ。比の肆月の。猛霽。妻の手枕。女兒の糸菽。張り後ま。は戸張の衣の。
 洗濯して。いとがし。横日追は。五布六布。七つさ。が。ふ樹垣へ。よせ掛る。戸のぬ。此間も。
 あつて戀し。た婿が。存を。まつと。松と。繁さ。は。箴刺の。雙。細刺の。長。た。日。あ。が。ら。由。斷。せ。し。
 女の。所。為。の。一。人。前。は。足。る。や。鹽。の。精。練。も。堅。た。家。柄。水。入。ら。む。親。子。等。し。た。諸。禱。か。く。る。竹。標。
 辛。動。や。と。外。面。眺。め。く。休。ひ。し。母。ふ。も。いと。優。い。げ。ある。心。操。さ。へ。標。致。さ。へ。合。が。ち。ある。
 糸菽が。愛。敬。つ。た。て。莞。や。う。は。母。さ。は。け。ぬ。朝。より。一。日。造。作。で。い。と。い。さ。う。勞。れ。も。ま。さ。せ。
 給。ひ。ぬ。や。茶。々。進。ら。せん。と。い。ひ。う。け。く。立。ん。と。ま。る。を。推。禁。め。否。措。給。へ。吾。儕。より。你。の。さ。こ。を。
 勞。れ。け。ぬ。折。々。發。る。持。病。の。積。の。原。は。と。い。へ。ば。婿。が。ね。の。浦。二。郎。殿。を。三。稔。以。來。信。も。非。を。往。
 方。も。ま。ま。む。忘。れ。も。得。せ。ぬ。去。々。歳。の。春。如。月。の。初。旬。如。此。々。々。の。事。よ。り。舍。兒。瀬。川。采。女。ぬ。

一は具一々鎌倉へ赴くあり。又程もなく還り来てん。と辭別し渡せらまを。一宿も留め
 あへむ。果敢おれ別れの爾後の音耗絶一と思ひらね。鎌倉より春毎に旅商に來ぬる人
 々よ。かゝる男子を知らむや。と雖問々々あるよ一かく婿殿の兄公吉次ぬ一も。其春身まが
 り給ひ一。と風の便に聞るのミ。それまら今一具ある事一も知ぬる刀劍道いと速た
 故ぞう一。そをたまれかくもあれ。結髪せし浦二殿。とく龍華へ違嫁らま。約束あり一
 夢々公の病著。とうくまは問ひ婿殿の母御も世に逝り給ひ一とぞ。泰山に似くや婿殿も。漢
 籍讀の癖おま。三年の喪とう云提。一故ふ寄もはうざる歎。胸安うらね。賣卜者流不
 問へ。三とせの春夏ふ。再會せんといひま一も。空ごのめふくけふまでも。驗おければ
 吾儕より。言ふ出さねど待らびけん。世に足らぬ齡もて。積と瘡を覺る。持病も折々
 發らむや。さばれ縁ご一盡もあら。三稔に及ぶ憂事を。昔語をる日もあらん。環り
 あふせを樂し。氣惱々々思ひ給ふ。と慰めらま。糸菰の報む兒一さ一騎を。團扇の風
 の便に。まらせぬ人を。恨不樂。乾さぬ袂。尚殘る。刺附引く搔捻り。母さほの常不

のあらぬ。物体おれ事宣ふ。世に姻遠に男女の。あるが中ふもと。とりま。親おも物
 と思ひま。郎の往方。まら波も。寄ると云日を。樂ま。まら何とも思ひ侍らむ。いつ
 くまでも二親の。恙もなく。まら。是にまら。事や侍る。といふ見つら。見
 うへりて。親おも物をおも。心づよく宣へども。言と心の表裏。寤寐が。ちか
 る。曉の夢も。見えん。郎の面影。それといひぬ。孝行を。郎の爲に誠心の。貞操。つら
 世の人。譽られも。せ。い。む。り。娛。一。か。らん。を。家。尊。家。母。の。昔。思。へ。は。色。情。の。科。作。り。一。罪
 の報ひ。ま。任。せ。ぬ。事。の。多。う。は。歎。と思ふ。愚痴。似。れ。ども。因縁。な。れ。ふ。も。侍。ら。む。一。こ
 を。い。い。で。も。の。と。お。が。ら。吾儕。が。故郷。の。豊。後。ある。政。珠。の。豆。町。を。り。ける。ま。夢々。親。の。名。に。三
 六。氏。の。折。竹。と。喚。れ。る。郷。お。ぬ。り。る。莊。屋。へ。母。さ。は。早。く。亡。り。給。ひ。て。後。の。母。御。お。男。兒。あ
 り。吾儕。の。爲。に。異。母。ある。弟。ふ。侍。り。ふ。た。かく。い。づ。れ。の。年。ふ。や。あり。けん。打。續。た。る。水
 損。早。損。一。年。の。貢。の。懈。多。く。領。主。の。債。の。大。う。と。あ。ら。ね。ば。後。の。母。御。の。相。計。ひ。く。吾儕。が。十
 五。な。り。ける。秋。長。門。の。赤。間。へ。售。違。られ。其。處。より。速。く。京。師。ある。六。條。へ。賣。更。られ。く。河。竹。の。瀬

日本武家源氏物語卷之九



又此の
世の
世の
世の



日本武家源氏物語卷之九

下下下

不沈ふしづも親おやの爲ためといひながら。舊里ふるさとの事こと灰かに聞きえ。かの折吾儕をりわがの身價みのしろを後のちの母御は、ご
 の私わたくしも密夫みそかをと走り給たまひうら。かくても貢みつぎの未進みまに得濟えぞまむ。参々まゝ公こうにそれを氣きに病やて。
 竟つひに身みまうり給たまひうら。家いえに傳つたへ。田たも圃はたも。貢みつぎの未進みまと彼此あちこちの。債おひめの爲ためのみを取とりま
 ぐ。遣のこるに弟あで、のミありしを。孤かれば里人さとびとの。憐あはれ愍みけく由縁ゆかりを討もとめ。肥前州ひぜんのくにへ遣つかして。一
 郷士ごうしに奉公ほうこうさせし。と聞きえし。のミふく信たよりもあし。叔亦さてまた後の母は、さほひ。かの密夫みそかをと共とも侶だに。宰府さいふ
 の方かたに赴おもむけ。細ほそ火け煙けむりを立たつは間まもあし。次の年つぎの春はるの比ころ時渡ときわたより。其その身みを更さらへ。彼かの密夫みそかを
 も身みまうりふた。と人傳ひとづてのミ聞きえたり。かくまで幸さいちふた吾儕わがなれば。苦界くがいの年限ねんかぎ闕あるとも。
 立たちうへるべに里さともあし。いうで生涯せうがい此身このみを任まかさる。信まことある客きやくもがあ。と思おもふ折をりうら。你あなたの参
 々まゝ公こうに。主君まぬくんの非義ひぎを諫いさめう給たまて。鎌倉かまくらを身退みりぞけ。京師みやこに到いたりて。文學ぶんがく武藝ぶげいを。人ひとに教おしえ。下京しもみやこ
 不樂住わびせまい。志こころをいせしが。圃はたらを吾儕わがと遇あひそめ初はつめ。通路かみかきの數累かずかさかるまよ。送かたかし思おもひ思おもひま
 て。久後きうごの女夫めをとと契ちぎしより。長なが年ねん際ぎを俟まちびても。夫をとこに當時そのとき浪人らうにんの。貯たくわへる多おほくうらね
 ば。何なにふ夜よも稀まれにありし比ころ。上野かうづけより年とし毎ごとに。京上みやこのぼりをる。絹商人ぬいあきびと。木瀬屋きせや鑿せ吉よしのきちと云い客きやくの。吾儕わが

屢々しばしばかよふあり。債身ちうけいをせんといわれうら。胸潰むねつぶれ落つち發はり。疎うとまし事こと限かぎりもあたと。
 ちほ然さらぬ面おもて色いろして。泣なくくぐと尋思あかんをいつるふ。あ、小漸こやうく惡あく心こころ萌もりて。女子をんなの智計ちけいも當
 坐ざの身み脱のがれ。債身ちうけいされて上野かうづけへ。伴ともまゆく道中どうちゆうふ。一日いちにち忽たちまち地身ちみを隠かくしつ。野中のなかのぬるた
 埋井うめいふ。二夜ふたよさ明あかして追手おつての人ひとを。彼此あちこちへ違過ちがひし。遂つひに下京しもみやこへ逃歸にげかへりて。你あなたの参々まゝ公こうに如此
 々々まゝと告つげく此身このみを憑たのみし。参々まゝ公こうに素もとより心こころ正ただしく。苟且かりそめふも在まが在まが所行まがところを。好このま給たまひぬ
 性さがなれば。最大さいだう驚おどろけ。せん術そへもあし見みえあがら。亦また亦また難がたたよしもあれば。己おのれ事ことを得えむ吾儕
 を將いく。舟行ふねぢを西にしへ走はしりつ。些ちとの由縁ゆかりを。心當こころあてに。此里このさとに留とどま。文武ぶんぶの技藝わざと彼此あちこち人ひとに。毎
 く月日つきひを過とし給たまふ。思おもふふまして行おこなひ。よれ弟あで子の附つきうら。田圃たはたと多く。購かひ求もとめ。郷
 士しふにあり給たまひふた。有あ如ごとく而して你あなたの七才しちさいの比ころ。参々まゝ公こうに風眼ふうがんより。隻目しかめを失うしなひ。風濕ふうじつさへ
 病煩やまわづらふ。隻足しかあし少許せうこ痺給しびたまひぬ。是これより後のちに諸人もろびとふ。武藝ぶげいを教おしゆる事ことも得えあらず。衣食いしょくに絆
 缺かく身みふ。あし給たまふ。弟あで子こ達たちふ辭いなし。隱居いんきよして。浮世うきよをやまく送り給たまへど。まが此風眼このふうがん風濕ふうじつに。
 曩さきに御身おんみが欺詐たばかし。債身ちうけいの客きやくの崇たらん。と潜ひそやうふいひ出いでく。嗟嘆さたんし給たまふ折をり毎ごとに。まが

あるべしともいひ難し。吾儕の昔ぞ罪深う。これらふよりて思惟る。親の因果の子は報ひてや。文學武藝は才闕て。家柄もよれ婿が存。早く縁を結べども。まご婚姻も整む。只一宵の添卧も得せむ。三稔別れざる。你的歎を傍より。共は氣病む親心。悔返らぬとあがら。ごが子に隠れよ。のあなれば。懺悔話説を。つるの。正お親と思われん。恥さよ。とむうり。涙ぐもる長物語を。聞くふ悲し。糸菘が。慰めり。共侶。夕露ど置く袖笠の方。依りつ。應じ。泣兒の。隠れども。堪ぬ涙。くれいそぐ。えや入相の鐘の聲。日。没果。鎮守の森へ。歸る鳥も。友音。鳴。手枕天。打。要。お言。時を移して。衣の乾。なんも。忘れ。とり。納れ給へ。と。親子。戸張。一。戸をか。よせ。序。背門を鎖。こ。こ。へ。来。と。先。奥庭。望。ゆ。母の。後。從。糸菘も。並引。提。い。背門の方。ふ。赴。ける。此。日。も。既。初。人。兒。う。ぬ。王。時。仇。人の。所在を。索。當。て。外。面。は。立。つ。秋。布。主。從。俊。平。の。庭。門。を。推。む。ら。う。て。鼠。川。氏。の。あ。候。歎。ある。在。宿。給。ふ。歎。と。呼。門。聲。は。ある。の。翁。の。人。肌。を。炬。燵。は。倚。て。卧。さ。る。枕。を。僅

は。撞。て。根。塚。の。あ。ゝ。ある。も。と。れ。り。何。處。より。来。給。ひ。さ。る。と。云。聲。聞。く。走。り。入。る。主。從。障。子。と。蹴。開。て。鼠。川。加。二。郎。と。く。出。よ。汝。が。爲。は。撃。れ。さ。る。瀬。川。采。女。吉。次。が。妻。秋。布。若。黨。村。澤。俊。平。の。親。良。人。の。仇。主。の。讐。脱。の。せ。と。刃。と。打。振。り。齊。一。進。め。ば。ある。の。翁。の。あ。何。事。と。驚。た。な。から。枕。を。も。つ。秋。布。が。撃。つ。刀。尖。を。受。留。め。炬。燵。櫓。と。盾。ふ。し。雲。時。二。人。を。挂。へ。け。り。畢。竟。秋。布。主。從。と。ある。の。勝。負。い。う。ふ。ぞ。や。そ。る。次。の。卷。は。解。分。る。を。聽。給。う。

松浦佐用媛石魂録後編卷之四終

石魂録後編七巻を釐々上下二帙とふを附言

今茲夏月予大恙あり。醫藥幸ひ効を奏め。八月七日病床を出たり。未だ本後

せざり。かども勉々稿を起せしもの。此編七巻即是之。只直急ふいそざりか

バ。書畫の兩工速ふ。其事と了るものうら。刷人未だ刀を竟む。よま且四巻を釐々早春

是を發販し遺る三巻も打續さく程なく出まべしと云。千翁軒の性急あるも時の便宜ふよ

海ものなれば。遂ふ其意ふ任しり。まうれども這後編の第十八回の末。伊萬里の段より。

五六七の三巻ふ至り。看官漸く佳境ふ入るべし。さるを七巻とりも揃へて。二度ふ觀ま

るの本意ふけきども。世の賣藥ふも半包。小包ふと云ものあり。大魚の解賣。豆腐の半拵。

皆是便宜の所行ふまば。千翁軒の量簡も。大うらそあらるべし。さて又此書の前編ふ玉

嶋清繩等亡滅せ。人寡る後編なれば。只秋布と俊平。と主従二人の道行ぶりを。三巻

あまりふ綴做せしが後の附儲ふおまる之。かまば五六七の三巻の譬は傀儡棚ある。三

四の切と敷い。まくほ一た。下帳も程なく發兌のよしを。江湖の君子ふ報んとく。戯房の

意味を識まのこ

○因ふい。いまほしき事あり。予が著し。る冊子物語の。ふりく二三十年ふ及べ

る。其刻板若干失せ。全うらざる故をもて。久しく刷出さるあり。さる板ど

もをあふり求め。足らざると補刻し。予が校訂と請む。恣に書と易。文と行脱し

く。再刷する者ありと聞ぬ。所云括頭巾縮緬紙衣。化競丑三鐘。この餘おほあるべし。こ

れらに予が名號ありといふとも。補刻し。予が校正と歴む。他人の手は成まるものおま

ば。予が全作とまべからむ。古板の戲著と物々しく。いふに大人氣をたふ似し。名と傳

る。が脆膳さふ。此こととると述るふおん。

曲亭主人



